

## ロシア極東地方の人口移動とその特性

中村 泰三

はじめに

1. 帝政ロシアのロシア極東地域の植民
2. 革命からソ連崩壊まで
3. 1990年代の人口移動

おわりに

キーワード：先住民、朝鮮人、中国人、ロシア人、コサック

### はじめに

ロシア極東地方の特性を人口移動の観点から眺めようというのが本稿の主旨である。この地域がロシア領に入ってから以降、特に、極東南部がロシア領に包含されてから現在までの人口の地域間移動（国内、国外とも）を中心に人の流れを概観したものである。ロシア全体の人口の地域間移動（国内、国外とも）については拙稿を参照願えれば幸いである<sup>(1)</sup>。

### 1. 帝政ロシアのロシア極東地域の植民

ロシアのシベリア進出は11世紀から始まり、

15世紀後半のイワン雷帝のユグラ遠征、カザン汗国の征服、16世紀以後のシベリア汗国に対するコサックの進攻とそれに続く東部進出により太平洋岸までのアジア地域がロシアの範囲に入った。しかし、今日のロシア極東地方の南部、すなわちアムール川の流域は清朝と締結したネルチンスク条約により清の領土であったので、ロシアは北部、北東部の人口希薄な地域を領土としていた。従って、ロシア極東地方の発展は1858年の愛琿条約、1860年の北京条約でロシアが極東南部を領土としたところから以降である。

極東地方の住民は1730年にこの地域で有力な先住民族の一つであるサハ共和国領内のヤクト人は3万人であり、この地域のロシア人の入植農民は17世紀末に164戸を数えるにすぎないように、僅かの人数が居住していた<sup>(2)</sup>。サハ共和国以外の極東地方でも先住民が人口の中心を占めていたが、その数は多くなく、19世紀の中ごろ2万か3万人といわれていた。また、ロシア領に入った南部を含めて同時期5万人とされているので、南部での先住民は2万人ほどであった<sup>(3)</sup>。

(1) 拙稿「ロシアの人口移動（18～20世紀）とその特性」、『史窓』第58号、2000。

(2) Федорова Е. Н., Население Якутии, Новосибирск, 1998, с.14.

(3) Рыбаковский Л. Л. Население Дальнего Востока за 150 лет, М., 1990, с. 48.

## 1. 西から東への移住

南部の新領土には1850年代中ごろから各地に軍事哨所が設けられ、軍人が駐留した。1855年アムール地方に初めて農民が入植したが、その後わずかの期間にコサック農民が移住し、1857～62年にアムール川の流域に67地点、1.2万人、ウスリー地方に23地点0.5万人が定住し、沿海州南部のウスリー地方への入植者が急速に増えていった<sup>(4)</sup>。

入植者はアムール州のように中央黒土帯、ウクライナ（特にチェルニゴフ州）からの農民が多かったが、沿海州では1866年黒海沿岸のオデッサから海路沿海州と結ぶ航路が開発され、ウクライナ、バルト沿岸からの移民が多かった<sup>(5)</sup>。

表1 農業移民（1883～1899）、1,000人

	アムール州	沿海州	プリアムールクライ
1883～1889	4.6	13.3	17.9
1890～1899	16.5	28.6	45.1
1883～1899	21.1	41.9	63.0

注(3) c.53

しかし、まだ表1のように移民数は少なかった。

移民の流れが大きくなるのは20世紀に入ってからである。特に、シベリア鉄道の敷設による影響が大きかった。19世紀後半の極東地方の人口はヤクーツク州を除いて1860年6.5～7万人、70年9万人、80年14万人、90年26万人と推定され、1897年の人口センサス（表2）では37.2万人であった<sup>(6)</sup>。このように20世紀に近くなるほど人口の増加率が上昇し、1880～1900年の20年間に3倍に増加し、1900年に40万人をこえ、移民（流刑囚を含む）の数が増大しているが、それでもシベリア、極東地方の移民の内極東地方の比率は低く、1890年代後半では5%弱を占めるにすぎなかった。

20世紀に入って移民数が急速に増加していくが、1907～1910年のそれは1905年の第一次革命の影響もあって増大した。1907～1917年に約26万人の移民が来住し、20世紀初めより年間2倍以上の増加ぶりであった<sup>(7)</sup>。また、1910～12年工業、建設労働者が10万人移住したといわれ、それまでの農業中心の移民から変化がみられた。

表2 極東地方州別人口（1,000人）

	1897				1911			
	ロシア人	先住民	その他	計	ロシア人	先住民	その他	計
ヤクーツ州	30.0	235.6	3.6	269.1	18.0	256.3	2.9	277.2
アムール州	103.5	5.4	11.4	120.3	242.3	1.4	42.6	284.3
沿海州	109.8	44.5	65.3	189.0	380.4	44.1	131.1	523.8
カムチャッカ州	3.9			34.7	4.2			36.0
サハリン州	18.3	5.4	5.4	28.1	5.6	0.4	2.9	8.8
計	265.5	290.9	85.7	641.2	650.5	302.2	179.5	1,130.1

Glinka. Aziatskaya Rossiya, 1914, St. Petersburg, c. 82～86.

(4) 加藤九祚『シベリアの歴史』1963、紀伊国屋書店、102頁。

(5) 原 暉之『ウラジオストク物語』1998、三省堂。

Рекк-лебедев А. Дальневосточная

Лифландия, Таллин, 1989.

(6) 前掲(3)、c. 50～56。

(7) 前掲(3)、c. 60、61。

シベリア同様極東地方の開発もコサックの果たす役割が大きかった。愛琿条約締結後ザバイカルコサックの一部がアムールコサックを設立、1882年にアムールコサックからウスリーコサックが結成され、アムール、ウスリー川の国境地帯に定住した。これらの軍団にザバイカル以西のコサック軍団やコサックに入隊希望の農民が流入した。彼らは農業移民より有利な条件で入植し、1858年アムール川中流に2,800人のコサックが、同年ウスリー川右岸に150コサック家族が移住している<sup>(8)</sup>。20世紀初めには3.5万人のコサックを数えたが、その2/3はアムール州に、1/3が沿海州に定住した<sup>(9)</sup>。また、20世紀初めになると農業移民がコサック入植者より多くなる。

表3 1900～1915年の農業移民 (1,000人)

	アムール州	沿海州	プリアムールクライ
1900	3.5	10.8	14.3
1901	3.9	10.7	14.6
1902	6.4	5.4	12.3
1903	3.9	8.9	12.8
1904	0.8	1.3	2.1
1905	0.2	0.3	0.5
1906	3.1	4.8	7.9
1907	10.8	68.3	79.1
1908	7.7	22.4	30.1
1909	16.9	23.8	40.7
1910	20.8	16.8	37.6
1911	4.3	11.5	15.8
1912	4.6	11.5	16.1
1913	6.2	7.0	13.2
1914	12.9	8.1	21.0
1915	2.2	4.6	6.8

注(3) c. 58, c. 61

## 2. 南から（アジア諸国）の移住

極東地方の地理的位置からくる人口流入のいま一つの形態は、西から東への人口移動だけでなく、南からの隣国李氏朝鮮と清からの人口移動であった。先述の統計のその他に入る人口に含まれている人々がそうである。

極東地方のアジア系流入民で最も数の多いのは満人、中国人で1880年にアムール州で1.7～1.8万人を数え、また、沿海州でも彼らの流入が増加し80年に0.6万人、94年に0.9万人、90年代末には3万人に増えていた<sup>(10)</sup>。極東地方全体で中国、満州人の数は4～4.5万人とリイバコフスキーは推定している<sup>(11)</sup>。その後も徐々に増え、1911年のセンサスでは10万人をこえ、朝鮮人の数を凌駕した<sup>(12)</sup>。

朝鮮半島から新たにロシア領に入った沿海州南部への朝鮮人の人口移動は、李氏朝鮮末期の農民の、特に東北地方の土地不足、貧窮化、飢饉による移動、その後の日本の朝鮮半島の併合による流出増とロシア側の極東地方の他の地域と異なる取扱い（流入の黙認、歓迎ともいえる動き）があって増加した。一般に1860年代から流入が始まったとされるが、それ以前から生じていて、清領であった1811年からとの指摘は鄭棟柱氏によりなされている<sup>(13)</sup>。その数は1867年

表4 主要外国人数

	1897	1911
中国人	43,225	101,430
朝鮮人	26,159	59,577
日本人	2,522	3,545

注(12) 160, 161頁

(8) 参謀本部編『西伯利地誌』1892、上314～315頁、前掲(3)、c. 48。

(9) 前掲(3)、c. 57。

(10) 同上、c. 51、55。

(11) 同上、c. 55。

(12) 沼田市郎訳編『アジアロシア民族誌』1945、彰考書院、159、160頁。

(13) 鄭棟柱著、高賛侑訳『カレイスキー 旧ソ連の高麗人』1998、東方出版、27頁。

1,400人、1870年代から増え、1880年代に1～1.1万人で、半数以上が沿海州南部に居住していた<sup>(14)</sup>。

20世紀に入って朝鮮人の数はさらに増え1906年3.4万人、1914年6.4万人となり、そのうちロシア国籍の朝鮮人は1906年50%、1914年31%を占めていた<sup>(15)</sup>。このような朝鮮人の流入が増加していったので、ウスリー川の流れる国境地帯ではすでに1870、80年代朝鮮人居住者数はロシア人より多くなっていた。

なお日本人は最も少なく19世紀末に0.2～0.3万人といわれた。日露戦争後日本人の数が増え、1906年の0.3万人から1909年0.4万人を数えた。季節労働者はカムチャッカを中心に多く、1909年0.9万人であったが、極東地方の日本人の季節労働者は最大年5～6万人に達したといわれる<sup>(16)</sup>。

これら外国人の居住者は1897年8.2万人を数えたので、極東地方の全人口の1/4をこえていた。20世紀に入ってロシア国内の西からの移民の増加により外国人居住者は増加しているが、全人口に占める割合は下り1/7となった。

最後にシリケウィチのアムール、沿海州への移住の時期別移住経路と移住者数を引用し、まとめとしたい。彼によれば、アムール州の植民史はシベリア及びザバイカル鉄道の敷設期までと1900年のザバイカル州のスレテンスクまでの連絡路の開設以後に分けられ、シベリア鉄道敷設以前の移民数は困難な旅程のため非常に少なく、1900年までは男女合計3.5万人にすぎない。一方、沿海州への移民は4期に分けられる。第一期は1883年までの陸路移住であり、第二期は1883年以降の海路移住、第三期は1900年以降の

海路とスレテンスクまでの鉄道とアムール川の舟運、第四期は東清鉄道による移動である。各期の移民数は第一期男女3,800人、第二期43,800人、第三期24,400人、第四期134,900人、総計男女206,900人と記している<sup>(17)</sup>。第四期が最も多く、鉄道による移動により移住が容易になったこともあるが、1905年の革命、その後のストルイピンの農業改革、日露戦争に参戦した人々の帰途上、また帰国後この地域への移住行程の容易さと現地での比較的結構な生活についての情報を流したことも大きい。

## 2. 革命からソ連崩壊まで

極東地方のこの時期の人口移動をみる前にまずソ連邦形成直後の1926年の人口センサスから現在までの人口増減の状況を概観しておこう。表5から明らかなようにロシアのアジア地域の人口増の規模は様でなく、特に極東地方がシベリアと異なる動きを示しているのが読みとれる。

ロシアの人口増と極東地方のそれは1926年から極東地方で最大の人口年になる1991年の間に、極東地方で5.1倍の増加率であったが、ロシアはその1/10、58%増にすぎなかった。

また、極東地方の人口増加率は東西シベリアに比べ1990年以降を除いて高いことである。もちろん、人口の規模が東西シベリアに比べて小さいが、それでも人口増が顕著であった。西シベリアは1990年代を除き一貫して東シベリア、極東地方に比して人口増加率が低かったが、90年代は東シベリア、極東地方と比べてわずかの増加を示し、他の二地方のような人口減少をみなかった。もっとも人口の社会減はこの地域で

(14)前掲(3)、c. 63。

(15)同上、c. 51。

(16)同上、c. 29。

(17)南満州鉄道庶務部調査課編『露領極東の農業と植民問題』1925、毎日新聞社、119～121頁。

表5 ロシアの経済地域別人口（センサス年及び1999年）、1,000人

	1926	1939	1959	1970	1979	1989	1999
ロシア	92,735	108,377	117,534	130,079	137,551	147,400	146,693
北 部	} 8,538	} 11,174	4,609	5,175	5,597	6,124	5,733
北 西 部			6,256	6,983	7,679	8,284	7,957
中 部			25,686	27,625	28,923	30,365	29,539
ボルガ・ブヤトカ	7,602	8,695	8,284	8,374	8,364	8,477	8,343
中 央 黒 土	9,542	9,153	7,769	7,998	7,797	7,740	7,821
沿 ボ ル ガ	12,330	12,299	12,635	14,556	15,546	16,410	16,864
北 カ フ カ ス	9,135	10,332	11,601	14,281	15,488	16,751	17,709
ウ ラ ル	10,807	12,844	17,524	19,003	19,416	20,279	20,389
西 シ ベ リ ア	7,432	8,927	11,252	12,109	12,958	15,003	15,104
東 シ ベ リ ア	3,305	4,771	6,473	7,463	8,157	9,155	9,031
極 東	1,572	2,978	4,834	5,780	6,819	7,941	7,252
カリーニングラード州	—	—	611	732	807	871	951

Население СССР 1973, Демографический ежегодник России 1999による。

表6 極東地方行政地域別人口（1,000人）

	1926	1939	1959	1970	1979	1989	1999	1991
沿 海 州	637	888	1,381	1,721	1,978	2,258	2,197	2,299
ハバロフスクライ	147	549	979	1,174	1,376	1,609	1,584	1,631
ユダヤ自治州	36	109	163	172	190	216	203	220
アムール州	414	634	718	793	937	1,058	1,015	1,074
カムチャッカ州	19	109	221	288	378	466	390	473
うちコリャーク自治管区	10	23	28	31	34	39	30	40
マガダン州	7	152	189	252	333	386	240	380
チュコト自治管区	13	21	47	101	133	157	77	154
サハリ州	12	100	649	615	655	710	608	717
サハ共和国	287	414	487	664	839	1,081	988	1,109
極 東 地 方	1,572	2,976	4,834	5,780	6,819	7,941	7,252	8,057

Российский статистический ежегодник 1999. Население СССР 1973による。

1960年代から体験している。

極東地方の高い人口増加はこの地方への人口流入によるところが大きい。リイバコフスキーはこの地方への人口移動を極東地方の文献をもとに1927～1936年110万人、1933～1937年130万人、1950、60年代180万人としているが、以下で

は第一次大戦時からソ連崩壊直前の1980年代までを1. 独ソ戦勃発まで、2. 独ソ戦から50年代まで、3. 60～80年代に分けて眺めてみよう<sup>(18)</sup>。

#### 1. 第一次大戦から独ソ戦勃発まで

帝政時代の移民は第一次世界大戦時途絶えた

(18) Рыбаковский Л. Л. Миграция

населения, М., 1987, с. 191.



が、1920、30年代を通じて人口移動に関する資料は1960年代以降より少ない。

1925年から計画的な移民が再び始まるが、移民の数は1914～25年に約5万人、1924～30年に約15万あるいは11～12万人と推定され、定着率は2/3前後とされている<sup>(19)</sup>。また、1920年代に自然増が25万人、社会増が30万人以上、つまり自然増が2/5、社会増が3/5とされている。

1930年代は自然増40万、社会増80万人余と算定され、前者が全体の1/3、後者が2/3となり、独ソ戦までの20年間に人口の増加は社会増によるところが大きかった。ただし、この時期は後述の極東在住の15万人といわれる朝鮮人の中央アジアへの強制移住、また、中国人、日本人居住者の帰国による人口減を差し引いてこのように増加したのである<sup>(20)</sup>。この地で稲作に従事していた朝鮮人の中央アジアへの強制移住は、極東地方の米の生産に大打撃を与え、反収、作付け面積の減少をもたらし、現在もその影響が続いている<sup>(21)</sup>。

極東地方への人口流入はロシア人以外に帝政時代から続くウクライナ、ベラルーシ人の流入も大きかった。また、外国人も多く、その中で最も多い朝鮮人は20年代に11～15万人を数え、農業従事者、ソ連国籍を取得しているものが多かった<sup>(22)</sup>。

これに対し中国人移民の数は少なく、その上定住者が少なかった。1930年代中ごろ約5万人あるいは11万人、季節労働者はこの1.5～2倍

と推定されている<sup>(23)</sup>。

日本人は最も少なく、1930年に約4万人といわれ、その大部分はロシア企業で働いていた<sup>(24)</sup>。しかし、1933年には日本人が主な職場にしていたカムチャッカから姿を消した<sup>(25)</sup>。これら外国人は1920年代末全人口の8%を占めたが、30年代に激減した。

ロシア極東地方の移民は政府の政策による農業移民が多かった。軍隊を除隊後ここに止まった人も多く、彼らも農業に多数従事し、除隊者のつくるコルホーズが数十を数えた。ただし、30年代になると農業移民として来住しても工業労働者に転化する人々が増えていった。

なお、1930年代後半の大粛正時代多数の人々が極東地方の強制収容所に送られ、東北部のコリマ流域にラゲリが集中していた。

以上のような人口の流出入がみられたが、極東地方の1920～39年の人口は157万人から298万人とほぼ2倍に増加し、全ロシアの人口増20%強に比べてきわめて大きかった。

## 2. 独ソ戦開始から1950年代まで

1941年6月の独ソ戦の勃発は極東地方の人口移動に大きい影響を与えた。戦争の始まりとともにこれまでの種々の移民が中止された。ただし、食糧供給との関連で水産業への移民は例外で、1943年だけで3,000家族が移住し、そのうちの70%の家族はカムチャッカに向かった<sup>(26)</sup>。また、数万人が戦争中北部地域に來住したとい

(19)前掲(3)、c. 74。

(20)前掲(13)、岡奈津子「ロシア極東の朝鮮人」『スラヴ研究』45、1998。

(21)拙稿「ロシア極東地方の現況」『東アジア研究』第6号、1994、高泰保・天野高久・オズノビキン、V. I. 「極東ロシア沿海州の稲作」『大阪経済法科大学科学技術研究所紀要』第4号、1999。

(22)前掲(13)、164～165頁。

(23)Zayonchkovskaya Z. "Chinese Demographic

Expansion into Russia: Myth or inevitability?", Demko G. J., Ioffe G., Zayonchkovskaya Z. Population under Duress, 1999, Westview, Boulder, p.138.

(24)前掲(3)、c. 78。

(25)拙稿「カムチャッカ開発と日本」『東アジア研究』第8号、1995、85頁。

(26)前掲(3)、c. 85。

われるが、西部からの疎開者は日本との軍事的緊張関係にある極東地方にシベリアと異なり一般に來住しなかった。

1940年代の自然増は第二次大戦終了まで日本領であった南サハリン、千島列島を含むサハリン州を入れて64万人であったが、極東地方の人口増は28万人であったので、実質30万人以上の人口減であった。さらにサハリン州の人口を除くと60万人以上の減少といわれる<sup>(27)</sup>。

例外はサハリン州で第二次大戦終了後の5年間に30万人の移民が政府の奨励等により來島した<sup>(28)</sup>。農業移民として、この州だけで1.75万家族が移住し、この規模は他の極東地方全体の移民と同数だといわれる<sup>(29)</sup>。

極東地方の朝鮮人は先述のように中央アジアへ強制移住させられたが、日本領であった南サハリンに1930年代から第二次大戦まで、特に1944年に多数の朝鮮人が徴用され、戦争終了後留め置かれ、1946年に1.5～2万人を数えたといわれる<sup>(30)</sup>。また、中央アジアからソ連国籍の朝鮮人が移住するが、その数は1.5～1.7万人と算定されている。なお、日本人は大部分引き揚げ、同時にアイヌ人1,500人も日本に引き揚げている<sup>(31)</sup>。

1950年代はこの期の人口増100万人のうち自然増は60万、社会増は40万人であったが、50年代後半は流出超過を示した<sup>(32)</sup>。この理由の一つはマガダン州の動きから理解される。マガダン州だけでスターリン死後の1954～59年に社会的呼びかけによる組織的募集から來住した人口は5.5万人を数えたが、国民経済に従事する勤・労働者は1960年に1950年より2万人減少している。これ

には強制収容所の閉鎖、囚人釈放によるところが大きいと思われる。また、アムール州、サハリン州からも人口流出がみられた。他方農業移民はいぜん多く、50～54年だけで4.9万家族を数えた<sup>(33)</sup>。

### 3. 1960～80年代の人口移動

1960～1990年の30年間は人口純増の時期で自然増、社会増により人口が増加した。極東地方はロシアのなかで若年層の多い開発地なので自然増加率はロシア平均より高かったが、それによる増加とともに社会増による増加が地域の人口増大に貢献したのである。概してこの期間の人口増のうち社会増が1/3前後を占めていた。

社会増はもともと辺境で生活困難な極東地域で種々の移住奨励策の実施による人口移動の推進もあって生じた。さらに1960年代にこの地域に種々の優遇制度が施行されたが、それが極東全域に拡大されたこともあり、人口流入を刺激した。もっともこの制度は流入人口の定住化を進めたわけではなく、高給支給を中心とした刺激策に批判があったことは事実で、人口の流入の激しさによる国民経済に与える損失が論議されていた<sup>(34)</sup>。

バム鉄道建設に代表される東部の開発によりコムソモールの呼びかけで來住した青年も多かったが、全体として社会的応募に応じた人数は減少していった。この傾向は30年代に少なく、50年代に徐々に上昇し、60年代に全流入人口の50%強が個人的な移動になった<sup>(35)</sup>。この原因の一つは先述の優遇制度の普及によるものであるが、組織的募集の中でも農業移民や社会的呼びかけ

(27)同上、c. 111。

(28)同上、c. 111。

(29)同上、c. 89。

(30)大沼保昭『サハリン棄民』1992、中央公論社、10頁。

(31)前掲(3)、c. 87。

(32)同上、c. 112。

(33)Русские (Этносоциологические очерки) М., 1992, c. 31。

(34)拙著『現代のソビエト世界』1983、地人書房。

(35)前掲(3)、c. 98。

表7 ロシアの経済地域別人口移動（人口10,000人当り）

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
北 部	-64	-75	-62	-68	-43	-41	-52	-55
北 西 部	-8	-5	9	59	50	52	35	42
中 部	3	20	38	72	56	46	47	46
ヴォルガ・ブヤトカ	5	26	31	60	37	26	24	22
中 央 黒 土	34	103	117	130	79	68	49	47
沿 ヴォルガ	20	63	78	99	62	37	40	35
北 カフカス	87	60	82	95	49	20	21	15
ウ ラ ル	-2	18	20	60	36	24	33	26
西 シベリア	-21	-5	17	74	33	20	43	22
東 シベリア	-31	-39	-25	-8	4	-8	-24	-23
極 東	-82	-189	-129	-192	-136	-87	-94	-100
ロ シ ア	3	12	29	55	34	23	24	19

出所：表5に同じ

に代わり、雇用企業からの勧誘による転職が増加していったからである。

なお、サハ共和国は極東地方のなかでは人口増の小さい地域である。ここでは主に金、ダイヤモンドなどの鉱業部門の労働者が流入した。1926～59年のセンサス間に人口移動資料が若干欠けていて正確さにやや欠けるが、約70%の人口増のうちで社会増のウェイトが高く、80%を社会増で占めていた<sup>(36)</sup>。また、1960～90年の30年間は120%の人口増であるが、社会増は35万人のうち1/3を占めていたと思われる<sup>(37)</sup>。しかし、この期間の社会増は他の極東地域に比べて小さくなく、1980年代末には社会増がゼロか社会微減になっていた。

### 3. 1990年代の人口移動

この期の期間は短いが1991年のソ連崩壊以降

の市場経済化への急激な移行により社会・経済的大変化が生じた時期であり、人口の動きにも大きな影響を与えた。変化はペレストロイカ末期からみられたが、極東地方で1990年に純流出を体験して以降この傾向が続き、特に1992～95年の4ヶ年に人口移動、流出規模とも大きかった。純流出は50万人を数え、クラロフが未曾有の人口流出と呼んだ動きで、これまで独ソ戦とその後の一時期を除き人口流入規模の大きかった極東地方での大転換である<sup>(38)</sup>。西から東への移動、極東地方内では南から北への移動がこれまでの一般的傾向であったが、東から西、北から南への動きに逆転した。ホレフもこの動きを捕らえ、1990年から純流出を記録し、この移動が農村と都市の両地区で生じ、流出の波はマガダン、カムチャッカ州、ハバロフスククライから最近では極東全域で生じていると述べている<sup>(39)</sup>。

確かに規模からみて極東地方の流出の大きさ

(36)前掲(2)、c. 91。

(37)同上、c. 92。

(38) Кулаков В. Пути регулирования миграционных процессов в Российской

Федерации, Вопросы экономики, 1998-5.

(39) Хорев Б. С., Данирова И. А. Общие итоги миграции населения России



表8 極東地方の行政地域別人口移動（人口10,000人当り）

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
ロシア極東	-82	-189	-129	-192	-136	-87	-94	-100
サハ共和国	-258	-258	-191	-295	-182	-118	-170	-197
ユダヤ自治州	-5	-118	-64	-256	-66	-86	-87	-93
チュコト自治管区	-621	-1,644	-969	-1,278	-978	-592	-566	-558
沿海州	8	-34	-31	-24	-42	-42	-49	-54
ハバロフスククライ	-18	-84	-51	-93	-69	-48	-34	-41
アムール州	-38	-142	-38	-130	-11	-38	-55	-61
カムチャッカ州	-76	-358	-368	-348	-280	-172	-175	-163
うちコリャーク自治管区	-127	-492	-629	-462	-270	-185	-316	-294
マガダン州	-503	-1,104	-597	-914	-759	-259	-217	-247
サハリン州	-13	-87	-185	-324	-301	-181	-185	-163

出所：表5に同じ

は目立っている。表7、8からも明らかなように、人口10,000人当たり移動が他地域に比べて大きく、また、極東地方北部で大である。また、これまで流入規模が大きかっただけでなく、アジア部の東西シベリアに比べて際立っていたからである。西シベリアは91、92年こそ流出超過であったが、以後流入超過に転じ、東シベリアは1995年を除いて社会減であったが、その規模は極東地方に比べて小さい。

広大な極東地方であるが人口は800万人にすぎず、開発地域で人口流入を求めるこの地域で逆の動きの生じたことは、この地方の開発の停滞、衰退をもたらすばかりでなく、国防上からも隣国の人口規模からみた不均衡が益々大きくなる上、隣国のなかで最大の人口を持つ中国からの人口流入による極東地方の中国化を恐れなければならないからである。

極東地方の人口の動きは既に述べたことがあるが、近年は一時より流出が減少しているとしてもマガダン、カムチャッカ、サハリンでの人口減が顕著である。また、ハバロフスククライ

北部、アムール州北部でも類似の傾向をもってしている。マガダン州では州都マガダン自体、1993～1998年間に15.3万人から12.2万人と20%以上の減少を示し、ススマン市も1.3万人から0.9万人と30%の減少を示している。また、アムール州ではバム鉄道の要地ティンダ市は5.7万から4.8万人に、ハバロフスククライのオホーツクは0.9万人から0.7万人へと減少している<sup>(40)</sup>。

人口流出の主因は経済システムの変化に伴う社会・経済的条件の悪化であろう。これには生活水準の急激な低下をもたらしたハイパーインフレ、経済の自由化に伴う輸送費の急騰、生活必需品の価格上昇（極東地方は食料、消費財の多くは自給できない）、これまで補助金支給で成り立っていた軍需工業を初めとする諸工業での生産低下と失業者の増加、住宅建設の急減による住宅供給、購入が不可能になったことなどであった。

ただし、人口の流出は生産の低下に正比例するのではなく、人口流出の主因は住民の最低生活を維持する収入が得られるかどうかによるというトルビンの指摘からみて、極東地方のよう

「за 1990–1994 гг. и роль миграции в формировании населения регионов, География в школе 1996–5, с. 13.

(40) Численность населения Российской Федерации, 1993, 1998による。

な厳しい生活水準をもち、元来物価の高いところではそれを克服する所得がなければ生活していけないことになる<sup>(41)</sup>。これまでの北、東北の辺境では種々の特別措置が有効に作用し（それでも還流傾向は大きかったが）、人口の流入超過がみられた。しかし、ハイパーインフレ、失業の出現はそのような有利な条件を消去してしまったからである。

極東地方のこの期の人口移動の今一つの特色は外国人の流入である。先述のように、この地方は中国人、朝鮮人が隣接して居住し、多数の永住者、季節的労働者が第二次大戦前まで存在した。しかし、その後は第二次大戦後の日本軍捕虜の長期就労やベトナム、朝鮮民主主義人民共和国の就労を除いて外国人の永住、長期滞在は限られた人々しか認められなかった<sup>(42)</sup>。

ペレストロイカ以降、特に90年代に国際交流が活発化し、地方政府との契約による中国人労働者の流入が生じた。外国からの人口流入についてこれまで若干取り上げたことがあったが、当初のビザなし入国が可能になった時期での大規模な中国人流入にロシア側が音をあげ、ビザ取得を義務づけ、取締も強化するようになった<sup>(43)</sup>。ロシア側でしばしば報道され、取り上げられたのは、多数の中国人の不法流入と不法滞在であった<sup>(44)</sup>。

ロシアではその数が全ロシアで100万人をこ

え、また数百万人ともいわれ、極東地方だけで百万人近くといわれた<sup>(45)</sup>。この状況のもとでジョレス・メドベージェフは極東地方の人口減にともなう労働力不足の補足の一手段として中国人の流入を認め、中国人自治共和国の設立まで提案している<sup>(46)</sup>。

中国人が100万単位でロシアに居住しているというロシア側の中国警戒心をあおるセンセーショナルな取扱いもあるが、ロシア極東地方の人口700万という数の少なさからくる現地ロシア人の心理的不安からもこのような情報が流されているように思われる。極東地方居住の中国人の規模がどの程度かについてのロシア側の1997年の調査では、アムール州、沿海州、ハバロフスククライでそれぞれ3～7万人、つまり9万～21万人とみていて、1994年当時イスベスティア、ウラジボストク紙に出た200万人よりはるかに少ないのである<sup>(47)</sup>。しかし、それでもかなりの中国人が極東地方だけでも居住していることは確かである。

問題は今後ロシア側の極東地方の将来対策として外国人労働者をどのように位置づけるかにより外国人の数が決まってくる。ロシアの人口は自然減が続く減少しつつある。この減少数は年々100万人をこえ、その一部数十万人をCIS諸国からの純流入により補っているのが現状である。

(41) Трубин В. В. Миграция и рынок труда в России, Общество и экономика 1995-2, с. 40.

(42) 拙稿「コムソモリスク——ソ連極東の軍需工業都市」、『地理36-12』1991、「最近のCISの人口動態——ロシア共和国を中心に」、『人文研究』46-7、1994、「最近のロシアの人口移動」、『大阪経済法科大学論集』第70号、1998。

(43) Захарова О. А., Миндогулов В. В., Рыбаковский Л. Л. Нелегальная иммиграция в приграничных районах

Дальнего Востока, Соц. ис., 1994-12.

(44) Бакланов П. Я., Романов М. Т., Мошков А. В. и др. Изменение в территориальных структурах хозяйства расселения Дальнего Востока при переходе к рыночной экономики, 1996, Владивосток.

(45) Московские новости 1998-32, 38.

(46) 日本経済新聞、1995. 1. 7.

(47) 前掲(23)、p.143.

表9 極東地方の行政地域別流出入者数

	1994		1995		1996		1997		1998	
	流入	流出	流入	流出	流入	流出	流入	流出	流入	流出
サハ共和国	9,127	38,216	7,611	9,026	8,611	21,090	6,996	23,359	8,265	28,026
ユダヤ自治州	4,864	5,267	4,674	13,873	4,161	4,202	3,524	3,484	3,701	5,903
チュコト自治管区	2,183	14,079	78,218	82,568	1,773	7,026	1,452	4,853	1,686	5,691
沿海州	25,917	33,620	44,317	52,555	21,072	27,514	17,417	25,698	20,168	27,299
ハバロフスククライ	22,606	30,359	45,173	45,287	18,309	24,740	17,928	22,705	18,553	24,939
アムール州	15,979	21,535	13,329	24,857	12,073	15,899	10,076	15,519	10,269	16,536
カムチャッカ州	5,432	20,855	13,149	25,196	5,413	12,893	4,768	11,994	5,397	11,899
うちコリャーク自治管区	393	1,920	—	—	513	1,101	216	857	141	769
マガダン州	4,988	27,963	19,130	38,805	5,131	11,960	4,501	10,845	5,836	11,837
サハリン州	6,628	25,848	30,892	46,989	6,743	17,718	5,302	16,618	6,021	16,129
極東地方	97,724	217,742	256,493	339,156	83,286	143,042	71,964	135,075	79,896	148,259

出所：表5に同じ

極東地方はロシアの地域で人口流出地域として際立っていて、その上ロシアの現下の社会、経済状況ではこの地方に来住者が増える見通しはなく人口減少の道を歩んでいる。2010年のロシアの楽観的な人口予測でも-2.5%の人口減（自然減755万人、純流入人口328万人、人口減370万人）であり、極東地方のマガダン州-50.3%、サハリン州-31.4%、カムチャッカ州-30.9%、ハバロフスククライ-13.7%、サハ共和国-11.8%、沿海州-9.2%、アムール州-6.3%というきびしい人口減の予測が出ている<sup>(48)</sup>。わが国でも今後の経済発展の維持に外国人労働者を年60万人受け入れねばならないとされているが、脆弱な極東地方の経済活動を維持、発展させるには、中国人を初めとする外国人労働者の受け入れが必要な状況にあると考えられる。しかし、この政策推進の上でロシア人の心理的抵抗が大きいことは容易に想像される。

## おわりに

ロシア極東地方の人口を人口移動の観点から

概説したが、人口移動からみてこの地方はロシアのなかでも独特の位置を占めていたのが分かるであろう。ロシアの最東端に位置し、19世紀後半以降急速に開発が進められたこの地方への人口流入規模の大きいのは当然であるが、ロシアのアジア地域の東西シベリアに比べても日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、中国に隣接、近隣する関係上、外国人の流入、定着現象も一時期を除いて顕著であった。

現在これまでと異なる人口流出現象が進み、予測ではこの動きは今後も継続し、極東地方の人口はかつての800万人余から650万人を切ると推定されている。ロシアの中心から最遠隔地にあり、国内からの人口流入を期待できない現在、この地方の社会・経済発展は周辺のアジア諸国との交流を進める以外にはない。採りうる手段の一つとして外国人労働者の利用が考えられるが、今後ロシアがこの方向に進むかどうかは、ロシア人がこれを是認するか否かの判断によるところが大きいと思われる。

(48)Heleniak T. "Out Migration and Depopulation of the Russian North during the 1990s", *Post-*

*Soviet Geography and Economics*, 1999, 40-3, pp. 196~197.

